# 命をつなぐ仕事

神奈川県立相原高等学校 畜産科学科　3年　古川 晴一朗

オービーという牛がいた。7歳にして3産、うち一頭は死産。足も悪く、当然の結果として、去年の春に淘汰された。そんな彼女に出会ったのは、私が相原高校畜産科学科に入学した高一の春のことです。学校で飼育されている大きな牛に一目ぼれした私は、学校飼育牛のほぼすべての飼養管理を担う、畜産部相原牛プロジェクトに入部しました。日々の活動で牛の可愛さをすぐそばで感じていた私でしたが、二年生の春に経済動物の運命を間近で見ることとなります。それがオービーでした。彼女は乳牛として重要な繁殖成績が悪く、肢蹄病を患っており、家畜としての役割を十分に果たすこと無くトラックに乗せられました。その光景を見守るしか出来なかった私は、乳牛が少しでも長く健康に生きる長命連産を目標とした牧場を経営したいと考えました。

「自分の牧場をもち、経営したい！」と考えていた私でしたが、現代の酪農について詳しくなればなるほど、自分の進む道が険しいものだという事実を突きつけられます。そこで、自分の夢をより現実的なものにするために多種多様な牧場実習に行かせていただきました。

一般的な繋ぎ飼い牛舎、ヘリンボーン式パーラーを導入しているフリーストール牛舎、観光客を楽しませるための観光牧場、山地酪農など、あらゆる牧場を見て回り、それぞれの欠点や長所を教えていただくなど、一心不乱に勉強しました。例えば、アニマルウェルフェアが重視される現代の畜産業界で、繋ぎ飼いを批判する意見をよく聞きます。その一方で、繋ぎ飼いを行うことにより個体管理の徹底に努めることができるため、放し飼いより牛の淘汰率が少ないといったデータもあるという話も耳にしました。飼育形態が多様化している中で、どのような飼い方が一番いい、というのは一概に言えないものだということ、牧場経営を考えるうえで「その土地に合わせた牧場経営」が大切だと気が付きました。

私が長命連産という目標を掲げる一方で、年々乳牛の平均産次数の低下が問題となっています。こうした問題を抱える中でより良い後継牛を作っていくことが重要です。「良い牛」とは食べた飼料を最大限に乳生産に繋げることができ、分娩を重ねても健康的な牛の事を指します。この良い牛を酪農家さんが出品し合う会があります。それが共進会です。この共進会に積極的に参加することで、酪農家さんとのつながりを持ち、自分の目を養う事が出来るのではないかと考えました。初めて参加したのは一年生の秋の共進会です。会場につくとピリッとした空気が漂っていました。そこへ、出品牛を乗せたトラックが続々と入ってきました。私の役割は、酪農家さんがきれいに洗った牛を汚さないためにバケツで糞尿を取ることです。正直、自分の役割を聞いた時はがっかりしました。しかし、いざ担当の牛についてみてとても驚きました。学校の牛とは比べものにならないほど大きな体、そして、

私の視界を遮ってしまうほどの乳房。大げさかもしれませんが、それほど初めて見る酪農家さんの自慢の牛は私の記憶に残るものだったのです。その牛は11部で、ショウまではとても時間がありましたが、牛体洗浄、毛刈りの仕上げ、乳房調整などを見学させていただくうちにあっという間に出番の時間になっていました。月齢を重ねるごとに力が強くなりリードが難しくなるため、ショウリンクに緊張が走ります。どの牛もとても静かに力強く歩き、リードマンも落ち着きながら丁寧にリードします。そこへ、審査を終えた審査員が指を差しました。1位が決定したのです。私がついていた牛は2位という結果を残しました。自分もパートナーとショウリンクの上を歩きたいと考え、必死に練習を重ねていきました。その結果、次の大会では酪農家さんの牛をリードさせていただき、その後も学校で飼育している牛のリードに挑戦しました。これらの活動で良い牛を見極める目を養うことができ、二年生の八月上旬に行われた神奈川県大会家畜審査競技会乳牛の部では、いままでの知識や成果を発揮することが出来、最優秀賞を受賞することが出来ました。

共進会で酪農家さんとの関わりを深める中でよく聞く話があります。それは、後継者不足の現状です。仲間意識の強い酪農家さんですが、知っている仲間が少しずつ辞めていくことをとても寂しく感じているそうです。これは神奈川県内の話だけではありません。平成29年度の日本全国の酪農家戸数は16,400戸、平成28年度から600戸の牧場が離農しています。これは29年度の事例だけではなく、ここ10年のデータを見ても右肩下がりになる一方なのです。離農と聞くと胸が締め付けられるような思いになります。牧場一戸に平均約80頭飼育されている今、たった一軒の酪農家が離農するだけでその牧場に詰まった思い出が無くなってしまうような気がしました。私は、この現状を打破するべく酪農を始めとした農業の普及活動に取り組みました。昨年、最寄り駅の橋本公民館と連携し、親子体験農業教室を開催したところ、10組20名の家族に参加していただきました。主な体験内容は、子供達が主体で畑に種を撒き、水やり、除草、肥料散布そして収穫です。これを9月から11月の三回に分け実施しました。参加している家族は、体験教室に関係なく、畑で育てる野菜の除草や様子を見に来ていました。やっとの思いで収穫した野菜をみんなで食べると、「農家さんの大変さがよくわかった」、「もう好き嫌いしない!」と言ってくれました。他にも牛が子供を産み、子牛に飲ませる牛乳を人間が分けてもらっていることを、乳搾り体験を通して伝えることが出来ました。

今、農業という仕事は知っていても何をしているのかわからない人がほとんどです。家の食卓に並ぶ肉や野菜、そして牛乳が、どのように時間をかけ、愛情をこめられて消費者まで届けられているのか知られていません。そこで、将来自分の牧場を持つことが出来たら、酪農教育ファーム認定を目指し、学校で行った体験教室を元に、家族向けの一日食育活動を行いたいと考えています。まず、乳搾り体験は欠かせないでしょう。酪農の基礎である、

牛が乳を出すまでのサイクルを理解してもらうことが出来るからです。お産を何度か経験している、温厚な乳牛で安全な乳搾り体験をしてもらい、最後に牛乳を使って簡単アイスクリームを作ります。このアイスクリームは、授業で学んだ安価で手早く出来るものです。こうして、生産から製造までを楽しくおいしく体験を通して、酪農に対する理解を深めていただきたいと考えています。そして飼養管理では、長命連産に則った酪農を実現させるために、70頭ほどスタンチョンで飼育し個体管理を徹底的に行いつつ、日中は足腰を鍛え、ストレスの減少を図るために休耕地での放牧を行います。これらを行うことによって地域から愛され、牛も健康な牧場を目指します。

オービーという牛がいた。7歳にして3産、うち一頭は死産。足も悪く、当然の結果として、去年の春に淘汰された。そんなオービーは、とても穏やかな性格で、名前を呼ぶと近づいてくるほど人懐っこく、みんなから愛される可愛らしい牛でした。オービーは救うことができませんでしたが、健康で少しでも長く生きられる「命をつなぐ牧場」を私は実現させます。